

「手作り」とモノをめぐるインタビュー

塩見 翔

(関西大学大学院 社会学研究科 社会学専攻)

はじめに

本稿は「手作り」に関心をもった筆者が「手作りの担い手（の女性）」に対して行ったインタビューデータを提示し、今後の研究に向けて若干の考察を加えたものである。

最初に本稿が「手作り」をテーマとする背景について触れておく。筆者自身はこれまで「手作り」との関わりが薄かった。衣料品や生活用品はすべて商品市場から調達しており、食に関しても加工食品が中心を占めている。一方で別種の「手作り」に対する欲求も昔から持っており、小学生のころには家を造りたい（正確には自宅マンションのベランダに自分用の小屋を作りたいというようなものだった）とか、鉄道模型の車両やジオラマを自作したいと考えていた。しかしこれらも構想を深めていくことで満足を得てしまったり、材料を購入してもその先になかなか手を付けなかったりで、物理的になんらかのモノを生み出す「手作り」とは縁遠い生活を送ってきた。

ところが筆者は、昨 2015 年春から大阪のとあるコミュニティスペース¹（以下スペースと略）の運営に関わることになった。このスペースは個人ベースでの様々なイベントの会場や、他の場所へ出向いてのイベント参加を呼びかける場などとして利用されているが、こうしたイベントの中には「手作り」に関連したもの（手芸に関わるものや、食に関わるものなど）が多く存在する。またこのスペースは寄付や行政からの助成を受けずに運営されており（寄付や助成に頼らないことはスペースの理念に沿ったあり方である）、スペース自体において「手作り」が前景化している。

このように「手作り」が必要とされ、かつ、高い価値が置かれる場において筆者が出会った「手作りの担い手」たちは、どのような動機付けで「手作り」を行うのだろうか。そこには「手作り」や作られたモノに対するいかなる価値観があるのだろうか。こうした疑問のもとで、筆者は「手作り」をテーマとしたインタビュー調査を計画した。まだ研究に着手し始めたところであり（本稿執筆時点でインタビューを実施したのは以下に述べる A さん 1 名である）、調査の蓄積、分析ともに十分とはいえないが、今後の「手作り」研究の継続に向けた筆者の研究ノートとして本稿を提示したい。

1 研究協力者の概要

インタビューにご協力いただいたのはスペースの運営メンバーとしてメーリングリストや SNS に登録されている A さん（女性、1977 年生まれ、会社員）である。

A さんはスペースのマスコットキャラクターをデザインしたり、ウェブ上でのイベント会計報告システムを考案するなどしてスペースの運営を支えているほか、お菓子作りのワークショップや、石けんを手作りするワークショップなども企画・実施している。そんな A さんを筆者は「手作り」の積極的な担い手と捉えて研究協力を依頼し、インタビューを行った。インタビュー実施時期は 2016 年 1 月、場所は A さんの自宅からほど近いカフェ、インタビュー時間は約 1 時間 40 分（休憩を除く）であった。

以下では A さんの語りをおおむねインタビューの流れに沿って提示していく。なお読みやすさを考慮し、文脈が変わらない範囲で会話の一部を加工している。

¹ 大阪市北区中津の「中津ばぶり家」(<https://sites.google.com/site/nakatsu3chome/home>)。

2 手作りのイメージ

インタビューではまず、「手作り」が何を指すのかが語られた。

A：手作りの概念は私の中ではそんなに定まっているわけではないんですけど。まず動力を使ったりする工業製品と、人の手だけでやっているものとはちょっと違いますね。手作りとなるとできるだけ動力を使わない、というイメージがあります。もうひとつは市場に出ているモノ、販売をされているモノではないモノ、というのがひとつ。いうたら市場で価値が付かない。もしくは付き過ぎてて誰も手を出さない。

塩見：付き過ぎているってのは例えばどんなものですか？

A：例えば「塩見さんに手作りセーター編んできたの」「わっ重い！」っていう感じです。手作りって。

塩見：市場で値段付けられないですね。

A：そうですね。だけど「ユニクロで 2 千円で買ってきたの。よかったら着て」だったら、それは手作りじゃないですよ。同じセーターで同じようなデザインで素材が一緒だったとしても。

塩見：そこいらで売っているのよりも意味が重いみたい。

A：うん。できるだけ機械の力を使わずに、自分の身体能力だけでがんばって作るもの。かつ、一般的に市場の価値が計りにくい。そういう感じの。市場の価値が付いたら、例えば人間国宝のおじいちゃんが手作りですごいのを作ったと、それは世の中に出したら何百万円ってちゃんと価値が付くじゃない。でもそうするとなんか、まあ手作りですけど、ちょっと違う感じがします。「製品」ですね。

A さんは「手作り」を、(1) 機械ではなく身体を用いて作られたモノ、(2) 市場化されていないモノ（≠製品）、という 2 点からイメージするという。身体を用いるという点は「手作り」のイメージとして広く共有されているだろう。一方、市場化されていないという点は「手作り」をアピールポイントとするような商品を排除することから、より A さん固有の手作りイメージを表現したものだといえそう。

さらに A さんは次のようにも述べる。

A：今はそうじゃないですけど、子どもには自分の作った手作りのものを食べさせなさいとか、幼稚園とかでも、お母さんの手作りをした鞆を子どもに持たせてくださいとか、そういう圧力は確かに。嗜みとして、母の愛を示す手段として、ちゃんとやんなさいよっていうプレッシャーは、あるところにはある。

塩見：そういうプレッシャー受けてやらされることっていうのは、[手作りとは]ちょっと違いますかね？

A：違いますね。仕事になるよね。社会から求められるけど、自分は満足してない。おカネももらえない。いびつだよねとって。

A さんは幼稚園などで母親に対して「手作り」が求められることを批判している。ここからは、(3) 社会的に強制されない、という「手作り」観も見出せる。社会的に強制された「手作り」は単に「仕事」にすぎないのである。

3 学校教育・家庭内学習と「私にも作れる」感覚

次に A さんが「手作り」をする動機を見てみたい。動機について語る際、A さんは手作りの背景としての学校教育と家庭内での学習をあげる。

A：まず、私だけではないと思うんですけど、基本、女性全般、家庭科で教育を受けてますよね。そ

ここでやっぱり何かを縫うとかリフォームするとか、食事でも被服でもなんでもそうなんですけど、そこでノウハウを知ってるじゃないですか。モノの構造とか。そうすると、街でいいモノ見たりすると、あ、これ私にももっと安くかわいく作れるんじゃないかっていうのが出てくるわけですね。

塩見：じゃあけっこう街にあるモノに対して、これは自分もできるっていうような形で評価できるっていうか。

A：そうそう。雑貨屋さんとかにあって「あーこれかわいいな」っていうのは誰しもあると思うんですけど。それはもちろんそのまま買って使うのもよしだけど、もっと安く作れるんじゃないとか、もっとかわいく作れるんじゃないとか。

塩見：もっと安く、かわいく。

A：うん。とか、なにになにさんにあげたら喜ぶんじゃないかとか。

塩見：あー、あげるっていうのもねえ。

A：そうですね。バレンタインのチョコとかはそうですね。買っておいしいチョコはいっぱいあるけど、やっぱり手作りをして送り合ったりするのもそこじゃないですかね。もっと自分のアレンジをして。

塩見：そういうふうにするのってノウハウがある？家庭科とか？

A：うん。教育だと思います。

ここでAさんが学校での家庭科教育経験を女性に限定して語っているのは、彼女の中学・高校生時代には家庭科が男女別の履修であったためだろう²。家庭科学習を通して身に付いた技術は、街で見かけたかわいいモノに対して「自分にも作れる」という感覚をいだかせるのだという。「自分にも作れる」「よりよく（かわいく・やすく）作れる」、自分自身で「アレンジ」できるということが手作りを動機づけるのだ。

さらにAさんは家庭内で手作りする人の有無、より正確には誰が手作りをしているのかという点についても言及する。

A：家庭の中にモノを作る人がいるかどうかっていうのがとっても大きいとっていて。うちのおばあちゃんなんかはよく編み物とか縫い物とかをずーっとやっていたような人だったんですよね。で、ちょっと教えてもらって一緒に何か作ったり、ミシンの使い方教えてもらったりとか。学校の課題を手伝ってもらったり、やってもらったりみたいな（笑）。そういうこともあり。教育はかなり関係してると思います。

塩見：おばあさん以外そういったことをされている方は？

A：家では姉がいたので、姉も課題で何かちょこっと作ってたりとかしましたね。兄は何もしない。やっぱり。うん。

塩見：男性陣は何もしないっていう感じですか？

A：そうですね。何もしないです。（笑）断言します。

この後、インタビューは1人暮らしでの家事労働へと展開した。そこで筆者が上記の家庭環境をふまえて、Aさんに家事労働に対して「女性としてやるのが当然みたいな感覚」がなかったかを訊ねると、Aさんは「女性としてというよりは、自分のことは自分でやった方がいいよね」と答えた。

Aさんが育った家庭においては家事労働や手作りが女性たちの領域であり、男性たちは「何もしない」環境であった。一方で、Aさんは家事労働や衣食住にかかわる手作りを「女性だから」するのではなく、「自分のこと」だからするのだという。Aさん個人の経験の上で家事労働や手作りはジェンダー化された領域であ

² 中学校における家庭科は1993年度から、高校の家庭科は1994年度から男女とも必修化された（西之園,中村2000:16-25）。

ったわけだが、この語りの上からは彼女が家事労働をジェンダー規範としてではなく、「自分のことは自分でやった方がいい」という、より普遍化された倫理観と結び付けていることがうかがえる。

4 手作りの魅力とモノの価値

次に A さんが考える手作りそれ自体の魅力と、作られたモノへの態度に関する語りを見ていく。

A：私たいへん不器用なので、手作りをした方がたいへん効率が悪いし高く付くんですよ。センスもないし。たいへん不思議なものでね。きっと安くかわいく作れるはずだと思ったことが、いつのまにかすっごい高く付いてたりするよね（笑）。

塩見：そうですね。それありますよね。それはあらかじめ分かっているわけじゃなくって、たぶん安く付くだろうと思ってされるわけですよ。

A：そうです。思ってますね。もっと自分はずまくやれるはずだという幻想はありますよね。何か作る前に。そしてやってみるともちろん、たいへん不器用なので。思わしいものができないわけじゃないですか。で、2 回目 3 回目くり返しやっていくと、おカネがかかってくる。でもスキルは上がっているかいまいち分からない。そして市場に価値がないので、がらくたが増えていく的な。

塩見：でもそこに、自分がやっていくんだから、思い入れとか愛着みたいなものは？

A：あー、ない。私の場合はないです。モノに対しては。がらがん捨てるし人にあげるし。

塩見：捨てるのは全然抵抗ないですか？

A：ないですねえ。うーん。

塩見：そうか面白いですねえ。僕やったら自分で作ったら出来悪くても捨てられないって思うんですけども。

A：うーん。何かモノを作るじゃない。作ったモノはもうできあがったら価値がないんです。私にとっては。作るまでのプロセスとか、自分の腕が上がったとか。こういうアイデアが思いついたとか、そういうのが面白いだけであって。出来たモノってもうなんか、価値半減みたいな。本とかでもそうなんですよ。怒られちゃうんだけど、一度読んだ小説とかは、読んだらもう消費しちゃってるから、もう価値を感じられないんですよ。だからもうブックオフとかにすぐ売っちゃったりとか人にあげたりとか。だいたいそうですね。教科書とかでも。試験が終わったら教科書は捨てるタイプです。

A さんにとっての手作りの価値は手作りのプロセスや、技術的向上に置かれている。一方で完成してしまったモノにはすでに価値がないのだという。

それでは A さんは子どもの頃から一貫してモノに執着したことはないのだろうか。

塩見：子どもの頃とかふり返って、モノに執着したことってないですか？

A：私末っ子だったので、お下がり人生だったんですよ。兄や姉のモノをいただいて。新しいモノをあんまり買ってもらうことがなく過ごしてきたので。あんまり新しいモノを買った、大事にしよう、これ私だけのものだというのが少ないかもしれないです。使ったら次の人に、使ったら次の人に。自分の使ったおもちゃとかも、近所の子とかにあげちゃったりとか。まあよくありますよね。

塩見：そういったところから形成されてきたんですか？

A：そう思います。はい。「トイストーリー」って映画見たことありますか？「トイストーリー3」ぐらいで、主人公の男の子がおもちゃを、成長して要らなくなったからあげちゃうシーンがあるんですよ。そこね、私すごい感動したんですよ。これまでお世話になったけど、次の人にあげちゃってさようならっていうのを、涙を飲んであげるんですけど。すごい分かるんですよ。

この一連の流れのなかで A さんは、まずモノに対する態度の起源を「お下がり人生」だったことから説明する。「自分の使ったおもちゃ」という表現からも、モノを自身の所有物というよりも、一時的な使用の対象として見てきたことが読み取れる。

一方で映画「トイストーリー」のくだりで A さんは、かつて遊んだおもちゃを手放す主人公に共感を示している。さらに A さんはこの映画を見た人たちが、主人公に共感する「分かる組と、なんでそこが感動するのか分からない組」とに分かれるのだという。それではこのシーンで感動した A さんは、やはりモノに愛着を抱くということだろうか。

塩見：じゃあその感動するっていうのは、手放すことに感じてるんですか？

A：何でしょうね。自分の娘を嫁に出す父親の気持ち？（笑）これまでありがたい。次に行っても幸せでな、みたいな。

塩見：そこには一応愛着はあると考えたらいいでしょうか？

A：そうですね。愛着があるのかなあ。でももうほかの人にあげますとか、捨てますとか、売りますとかになった瞬間、何ていうか、バサって切り離すような。

この部分からは、A さんが「モノに執着」とまではいかずとも、一定の愛着を抱くということがうかがえる。とはいえそれは「バサって切り離す」という割り切りが可能なものであり、コレクター的な「愛着（執着）」とは次元のことになったものだといえるだろう。

それでは A さんにとってのモノの価値とはなんだろうか。彼女は海外旅行の際に現地で使用済みとなった切符を持ち帰り、それを葉にしてインタビューの際に筆者にくれた（図 1）が、この葉をめぐる語りからそれがうかがえる。

A：この電車の切符はすぐにゴミ箱に捨ててもよかったんですけど、葉にしたのはやっぱり愛着があるからなんです。ちょっとかわいいとか思い出に残るといいなど。その時はそう思った。でも、塩見さん電車が好きだということが分かると。あげたら喜んでもらえたと。そしたらそっちの方が価値が上なんです。やっぱり。自分が持ってウフフって見てるよりは、鉄道の仲間に渡れば。見てもらって話題にしてくれるとかね。使用していただいた方が、ずっと価値があるんじゃないかと。



図 1 A さんが葉に加工した切符

ここには切符をそのままではなく葉へと加工するという手作りへの志向と、モノを人と共有することによって喜びを見いだそうとする志向が表れている。モノはそれを人にあげたり、話題にしたりすることを通して、つまりコミュニケーションツールとすることによって、より積極的に価値づけられるのである。

おわりに

本稿では「手作りの担い手」としての A さんへのインタビューを通して、「手作り」のイメージや動機付け、そして作られたモノの価値について見てきた。「はじめに」で記したとおり、筆者の「手作り」を対象とした研究は手始めの段階にある。インタビューでは本稿で示した以外にも興味深いテーマが語られたが、そ

れらに触れるためにはより詳細な追加インタビューが必要となるため、機会を改めて論じることとする。また、インタビュー対象者を拡大し、ジェンダー、手作りの領域（衣食住、趣味）、世代による差異などについて検討していくことを今後の課題としたい。

【参考文献】

西之園君子,中村民恵, 2000,「戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷（第1報）—学習指導要領における被服教育指導内容の改訂—」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』30（11-29）